鎮西八郎為朝外傳椿說弓張月殘編上

913.56
Ta624t
t

曲亭馬琴編次

鎮西八郎爲朝外傳椿説弓張月

東京稗史出版社藏版

25.8.10
210061

古城高聳白雲散。激江大望石窮。山色朦朧。
朧環檻外。水光瀲灩。映牕中。遥憐大義千
秋隔。更歎雄圖一旦空。回首太堪頻借問。野花
寂寞對春風。　城頭一望尚巍然。佳事
唏噓獨可憐。空住空飛窺復鳥。荒臺幽
鎖而中烟。曾扶社稷聲名重。更濟乾坤節
義堅。若問先朝亡国恨。從來但有失忠賢。

楊文鳳自云城主毛國鼎者先朝之忠義也一日為逆者殺害國鼎亡而不久先朝亦失身焉

右琉球楊文鳳中城覽古詩　著作堂主人録

阿部藏書

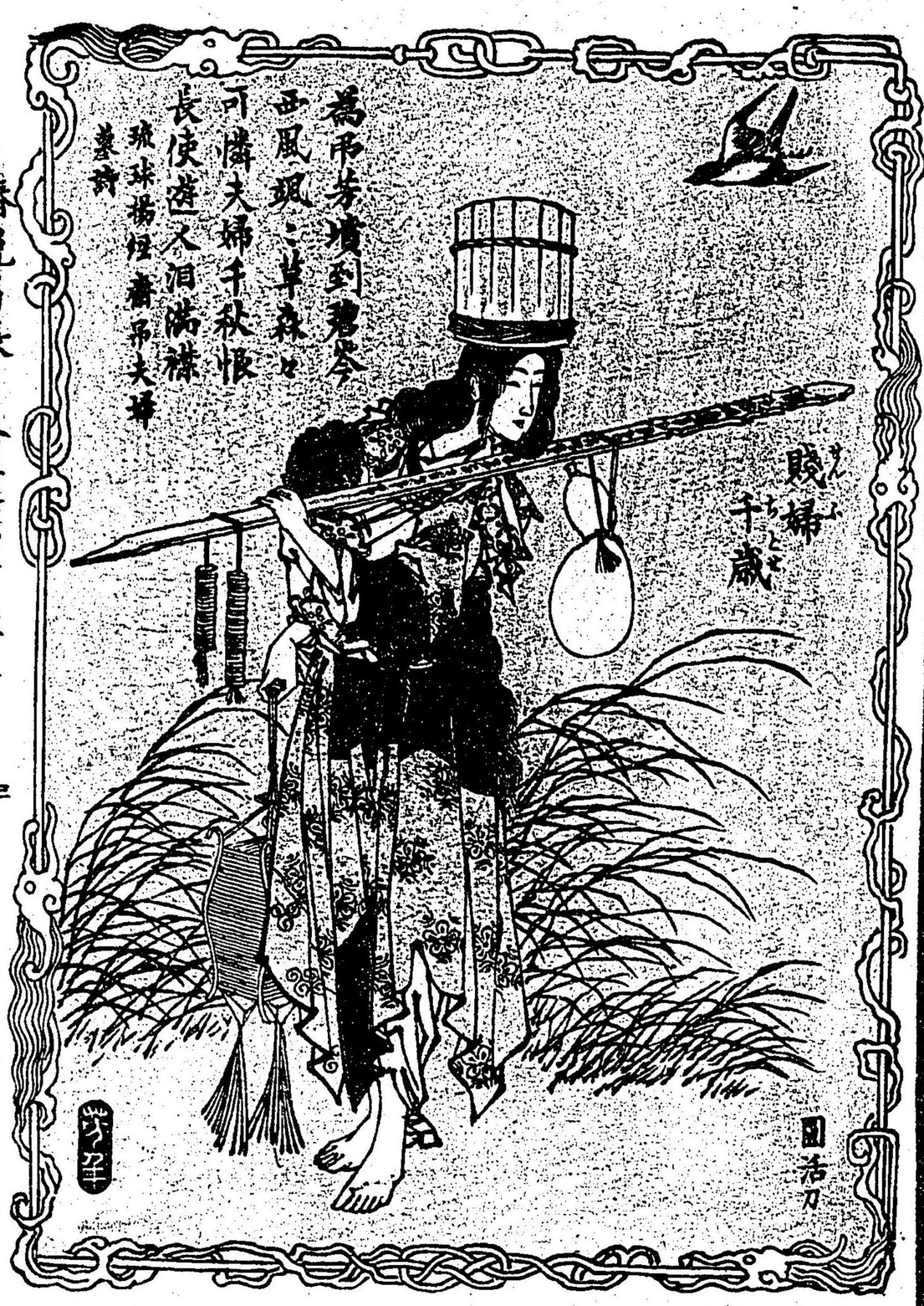
古城高聳白雲叢。渺渺大望正窮。山色朦朧環檻外。水光瀲灩映牕中。遥憐大義千秋隔。更歎雄圖一夜空。回首不堪頻借問。野花寂寞對春風。

城頭一望尚巍然。佳事啼噓獨可憐。空飛霜後鳥。荒盡雲幽。鎖而中烟。曾扶社稷聲名重。更濟乾坤節義堅。若問先朝亡國恨。泛來但有失忠賢。

楊文鳳自云城主毛國鼎者先朝之忠義也一旦為逆者殺害國鼎亡而不久先朝亦失鼎

右琦琭楊文鳳中城賢吉詩　著作堂主人録

悲歌雅楽
人生事
窮達難事
達化權
北斎画


賤婦千歳
為弔芳墳到君今
西風颯々草森々
可憐夫婦千秋恨
長使遊人泪満襟
琉球楊程齋弔夫婦
墓詩
北斎画

鎮西八郎為朝外傳椿說弓張月殘編下帙目錄

第五十七回　巴麻島為朝訪神仙　松山磯島長救夫妻

第五十八回　姑巴島父子再會　射飛鳥神童談兵

第五十九回　負箭舜天丸赴山北　造舟紀平治出孤島

第六十回　借劒樵夫俟婦　秉燭山妻留客

第六十一回　汰涙為朝瘞窣都婆　穿壁三兇刺源按司

第六十二回　天孫廟阿公贄首級　城山中毛鶴張寃家

第六十三回　推因談果解手刀　救弟認祖落月弓

第六十四回　剪頭髻舜天丸全孝順　刎情人紀平治懲隱慝

第六十五回　發靈箭舜天丸射矇雲　斬賊將林太夫贈兵粮

第六十六回　夫婦塚兩兒誕生　龍宮城三賢述志

第六十七回

憐苞苴王女示寂

第六十八回

中山府舞天即位

員外一條附録

為朝神社并南島地名辨略

聽童謡為朝決別

祭神奏樂大團圓

統計一十二回　殘編下帙五册の目録終

全部五編二十八卷六十有八回條目盡子此矣

前編六卷十五回　後編六卷十五回　續編六卷十五回

拾遺五卷十一回　殘編五卷十二回

每編目次各出於簡端

是書文化乙丑年春月初發硯同庚午夏日全結局

殘編引用舊説崖略

壽星老（ジュセイロウ）即歌曲。南島志云。其曲。則有王者國。百花國。為人臣。為人子。楊香。壽星老。上蓬萊等。

紙糊福禄壽（パリヌキノフクロクジュ）中山傳信録卷二云。天妃宮前沼池内作假山。作白鶴池上。斧大松一株。立地中。上亦作一白鶴。如飛鳴相向狀。四圍以紙皮作假山。羅草花數十種。圍之中作一老人二鹿。如山呼祝壽狀。此那覇人所設。

板舞（イタマヒ）中山傳信録卷六云。女子於歳初有板舞戲横巨板於木椿上。兩頭下空。三尺許。二女對立板上。一起一落。就勢躍起。五六尺許。不傾跌。歌側也。

多褪國タヂコク孟久人ヤクヒト即琉球。又作多尼島掖玖人見于日本紀。續日本後紀。文德實録。三代實録等。

貴賀井島キカヰガシマ即琉球。又作奇界見于東鑑。

神社ヤシロ南島志云。宗社之神者。伊勢大神祠自尚金福始。八幡大神自尚泰始。波上之社。洋之社。尸葉那之社。普天間之社。末吉之社。並皆奉祀熊野大神也。其始不詳云。菅神祠自久米島人林氏始。又有天妃天孫等祠。又浮圖法。唯有禪與密之三教耳。此餘古實。若有管見。則引用以為闕典。今不遑枚舉臨編自見。

庚午仲春

曲亭陳人解再識

鎮西八郎爲朝外傳椿說弓張月殘編卷之一

第五十七回

松山磯に島長夫妻を救ふ　巴麻島に爲朝神仙を訪ふ

爲朝王女に具志頭ぐすくを賜ふ　雲が兵等夥出來て落人を搦捕れと呼ぶ聲の耳邊に聞ゆるに心のみ猛りといへども力衰へ勢竭て脫れ果べうも思ひねざりしに誰といはちを水際に繫ぎ蘆のうちより忽然と一艘の獨木船を漕よして爲朝夫婦をさし招き。とく〳〵船にめさまよといふに敵か身方かはしりねねど幸急かれば問定るに及ず爲朝は王女を扶引盛たる足を踏運べして船に閃りと乘ねねば船人艫て漕出そ。その疾と礫の氷を走るがごとく。立地に澳下へ一里ばかり漕ひらかしけり爲朝も王女も思ひがけねねば彼船人にうち對ひかゝる危窮の時に臨てゆくてなくも救れしは過世の契あるにおそ抑何國いかなる人ぞ名告たらしいへと宣へば船人は忙しく楫をとゞめて舷に蹲踞し別れ奉りてより。はや七年におりていへば面忘れたまふなるべし。おれは佳奇呂麻の島長に林太夫

といふものなり。按司御夫婦のこのゝたりにて困められぬふ事を神の告ぬふまよりて快船にうち乘り。おん迎ゝ參りてゆ。そゆ長物語おきゝ後ゝこそまうさめ。御氣色のいたく餓ぬふと見たてまつるゝまづ齋ーたる物を進らーゆゆんと信ぎちて船底より飯櫃燒魚おんどをとり出し亦紅酒一瓶をもてきゝめ進をきゝ夫婦ゆ海月の骨ゝあふこゝちして島人等が平生とをる海鹽飯も百珍の美味にいやまー只一瓶の村酒も甘露のごく思ひたまふおるべー爲朝かさねて盃をあげ。さて王女ゝ宣ふやうゝれ島食ゝて猛火に罹れ咽喉渇きて堪がたさゝ駒馬の鮮血を吸ひまき凡馬の肉を食ひーものはやく酒拭飲ざれば身悪瘡を發ー久ーからずーして死をといへり。ゝれ馬肉を食ゆざれどもその血を吸ーかゝ今に心に快からず。おかるゝこゝに求ずして。一日の飢を忘れ又酒を喫みて馬姦を解をけふの酒食ゆ價千金真ゝ崑山の片玉おりゝおゆゝお長が誠忠のゆたす所忘ゆべからぞと宣へゝ王女ゆいよゝ島長が厚紀志を賞嘆ー七年已前佳奇呂麻にあゝー浮世を潜ひつゝ長が信ゝ露の命を繋ぎ得たきゝその面影を忘るべうゆあらぬども身ゆ疲れたり事急ゝて君もゝらゆも外々ーくその人おりとゆおらざり紀情薄ーと恨おせそと真實やかゝ賠話ぬへゝ林太夫ゆ忙ーく艇に頭をさー著三十六島おゆる中ゝ佳奇呂麻ゆ都へ遠く人影稀おる荒磯おるに再び三たび君御夫婦り供途を救ひ奉る歟ーさゆ嶋夫が飾さる言語に盡ーがゝーさても一昨の事おりー身の長一丈ゝまりゝーて面ゆ衆のどくあかやかゝ鼻の高ゆこの搨梳を三つも續たらんやうゝて修驗者めゆたる旅客長が門ゝ來ていふやう翌有翌のこゝ爲朝王女もろともゝ嘆雲が賊兵に囲られ具志頭の東おる松山の磯ゝ到るべー汝はやく船を出ー彼處に赴きてあれを救へ。といそがしたり。いと怪ーかりけれゝ吾濟おそる〳〵御身ゆ原何等ゝ人ゝて何國より來ぬひたる。こゝらにゆ見もおれぬ形容おり。と回答ゆるゝ彼修驗者黙頭て。おかし思ふゆ理りおり。ゝれゆ是大日本人皇七十五代の天子崇徳院のおん使ゝーて讃岐國象頭山より來つるゝのおり。もー疑ふて更遲々せゝ後悔ゆるとも及びがたけん。はやくゆきゆね。と催促をいよゝ怪ーきおといふべうもあられど推かへーて問ゆゝ。あーかりなん。とおもひて仰心得ておそひへゝ八郎按司に緑由を告奉る爲おれゝ名告おらーぬへといふゝ修驗者その回答ゆせて。濱千鳥跡ゆ都ゝかよへども身ゆ松山ゝ音をのみぞおく。と三たび吟ーて。の紀消すどく失ゝけり。こゆ平事にあらずと思へゝ島人等に告おらするゝ遑おく只妻子ゝのゝ如此々々の事ありと聞えおらー俄頃ゝ酒食を准備ー糧

米用水を積入て船出してゐいひしが具志頭までゐ海上百里ゑ餘れり。かゝる小船ゑて。けふ豆瓜間ゑ到らんと心もとなく思ひながら建帆あげて走らするゑ殊さらゑ追風ゐよ。船の行と平日ゑをぐまてきのふの黄昏に松山の磯へ着たるときゐ。おほ夢のこゝちしたり。さて接司や在をる王女や在すると項を長やかゑして岸のかたを見つれども。水際ゑ立在人ゐあらず覺法かおとかぎりおけれゞ船を蘆の中ゑ繫ぎとめ里ゑ赴きて大里の爲体を外おから聞くゑ長川大里山の敗軍ゑ接司も王女も擊れなひぬといふものあり。げゑも島袋のかたゑ兵火發りて天すさまじく煙の中ゑ焔の飛ぶさへ遠く見えたり。淺ましくも悲しくて只忙然と立在しが所詮神の教ゑまかして。船ゑて待奉るゑ志かゞと思ひかへして忙しく舊の水際ゑ立歸りゑなれど心いよ〳〵やすらゐず。目瞬もせてあくる夜の岸のかたをみうち瞻望てひひしゑ件の異人が教ゑたがゐや君御夫婦が岸ゑ立在追蒐る敵を見かへりなふを是おり不りと見奉るゑ身ゐ松山ゑ音をあくと聞えゑ露違ねゞまづ彼和歌を口吟み船漕よしてひと一五一十をものかたれゞ爲朝ゑを聞もあへや。そゐ疑ふべくもあらぬ讃岐院の神靈の吾を救ゐせなひしゑ。彼演衝の三十一字ゐ新院讃岐の松山ゑ在せしと知手づから五部の大乘經を書寫して都へつかゐしたまふとて歌ゞなへる御製おり。ゑかるゑ少納言入道信西が阻えまうせしゑよりて朝廷ふたゝび会議ありて彼經卷をそがまゝゑ惰をくも返さきたりされゞ院の御怨み日来ゑいいやましして天ゑ祈り地ゑ禱り魔界ゑ入て帝をはじめ。されに強顔さ奴原ゑおもひおらせんと誓ひなひし名ところ似たる松山に爲朝夫婦が呻吟ふを聚もおろしめされ。佳奇呂麻人に救せなふ君恩いとも恐しと身を投ふして數回東のかたを拜しなへゞ王女も感涙禁めあへず良人は後方に顧著なへゞ林太夫も今更ゑ。事著明おるとゝちして共ゑ感嘆おたりける當下爲朝ゐやうやくゑ頭を擡去年利勇を誅したるはじめより島袋ゑて曙雲ゑ火攻せられ馬の腹中ゑ入て猛火を避たるを亦王女も大里山の敗軍に士卒悉擊し辛じて國を脱脚島袋ゑて夫婦ひと内ゑおりぬるよを物ゞたりなへば林太夫ゐ聞く毎ゑ或ゐ驚死或ゐうち斃死或ゐ歎びてみな是神の擁護によらせなゝおりとて末たのもしき思ひをおす程ゑ船ゐ亦二三里あまりぞはしりけば爲朝かさねて嶋長ゑ對ひけふの締帆ゐ追風ゑあらを歌何處へか船をよせんと思ぬと問なをゞ林太夫答てさンひ彼爾せ前向ゑ雲のごとく見えたるゐ姑達住津奇奴。巴麻島伊計島とゆ四の小島ゑて巴麻嶋伊計島ゐ住む人もひゐを今宵ゐおゝらへ船

を歐翌の順風をまちてこそ佳奇呂麻へおん供つかまつりはべんといふに爲朝おかるべしとて。そは議に從ひねひしかば巴麻島を投て漕ぼどに。その夜亥の北及に件の荒磯へ乘着たり元来船に齎したる糧も水もあり人住む島にあらずといへば岸にのがるも益おしとて主從三人。劔杖枕にして長き夜すがらあかしねるに。敵を洗ふ涙の音のみ凄々くて。睡らんとすれども寢られぬ。やうやくに笘を漏る星の光りも薄くおりて。おら波の隙よりあるかゆく隨に島山のかたに笛の音幽に聞えこれ爲朝枕を敲て。こゝに人おき島おりといふに。物の音のそるにこゝろ得がたし。あれはいかなる。と訝ねるに。林太夫も耳を側ておもしこれをうち聞て思ひあはせる事こそひるに今より六七年のさかし。何處ともおりはねど仙人の在するとてをさ〳〵人のいふ事はひし件の仙人天よく晴たる日は鶴に駕り雲に坐し三十六の島々をめぐりねふとおん。もしこの島が彼仙のすませねふ處にやあらんずらんさらぬにかゝる無人島に鼇水遊山をするものゝあるべうも覺ひずといふ爲朝これを聞て亦王女にむかひいかに思ひねふやらん瀛洲蓬萊に仙人の集會ところんとてふるく物にもおるしたり。おからぬかゝる孤島おりとも仙境おらずといひがたし。もし偶遇する事もあらば。嗽雲を擊破るさはきともおりぬべし。

いざ訪ばやと宣へば。こらはもおの思ひ侍り。俱しねへとともに潮水にて激ぎ鮮血に塗れたる上の衣を脱捨て心ばかりは祓禊しつ。島長林太夫を殘しとゞめて。船を守らし夫婦迭に扶助られて巖に携はり。岸に這のぼり笘の音のするかたへとてあゆみねふに天は既に明はてゝ。旭海よりさし昇る隨に彼此を見かへりねへば。沙石は梅花の散れるがごく。松柏は龍蛇の蟠るに似て。浮世に遠き佳境おり。彼流水に遡洄て。桃源に到りしもかくやと思ひあはしたまふに何とおく心清み。體かろくして疲勞を忘れ。足の運びもそゝむまゝに。はや島山の麓に來にけり。さる程に笘の音はいよ〳〵近く聞えて。忽地山本なる樹蔭より。ひとりの童子横笘吹すさみ。出来るに大さ三歳駒に等。白鹿に清水波入れたりとおぼしき。歌二ツを唄ひ。時おらぬ桃の花を折添て。爲朝も王女もこれ仙童と見ねふから。恭しくむかひすゝみて。物ゆひかけんとしねへば。童子は笘の音をとゞめて。莞爾とうち笑み。来つるものは爲朝夫婦おらぬやきのふわが師の宣はせしとあり。豈おん大里の按司八郎爲朝。その妻白縫王女を將て。詣来るとあるべし。汝わが爲にいへ。爲朝ふたゝび殘兵を聚て。嗽雲を擊滅さんとおらば。直に姑巴島へ推渡りてその人を索よおよおん充翼を得つべし。おかはあれど今茲は爲朝四十三歳。おかも絶

命遊年に當れり。その星に計都にして無空在所巽の隅にあり。いまだ寇を擊べからず明年の春の季に至て事を謀らに大吉なり。按司功成り名遂るの後わを必ゆきて相見ゆべし。今より六年を經たらんにに八頭山の邊に俟べしと聞えおちせよと宣ひきかくてわが師に鶴にうち乘りて東海へ赴ねひしにきのふの亭午にこそきべわが師にこの島にはーまさず按司はやく舊の船にかへりて姑巴島へ渡りたまへといふを爲朝王女にいまだ名告もあへぞーておられしにて心にふかく驚嘆おて露べかりも疑す真仙の教諭謹でうけべりいひぬ只道顔を拜せざるを恨とをるのみ抑おん身の師とーなふ。真仙に往昔より跡をおの島とにやめなへる歟願にくに道号を告おらしたまへかしと宣へべ。童子微笑てこが師の事に忽卒にいひがたしおをを見べおのづから曉る事あるべしと回答つゝ瓢に挿たりける桃一枝を拔とりて遞與せしかべ爲朝左右の手に受捧て。おほその故を問んとしたまふ間に童子に鹿を牽いそがし左手おる茂林の中へ走り入るにそは疾と追ふべからぞ忽地見へぞおりにけれべ夫婦に面をあはーつゝまを。まず奇異の思ひをおーて目今童子がとらーたる桃の枝を見なふに香氣馥郁とり花僅に八葉ありなり下枝の花に六葉おるが衰凋み上おる二ッにいまだ開かぞなほうちかへーておがめなふにさゝやかおる短冊を著たりされべこそとて掌に受載て王女とゝもにおれを見なへべ。

ゆにーへのためーも思ひいづの海におとふ島の跡を見るかお。

と陰文にぞ印たりける爲朝おれを讀果て。ちち驚きて王女を見かへり是に此保元のころ伊豆の大島にてわが詠ぜし歌をり。この歌につきてにくさくの物がたりあり爲朝配所にありしとき往昔曽祖義家朝臣金の牌つけて放ちなひし鶴忽然と飛來て。こが傍にをり。この鶴にその已前古院の仰によりて爲朝潜におの國へ索來て王女に玉と換たるものこ。おかるに彼鶴に島羽院にて放生行れたりと聞にしに蒼海原を疾ぎ來て爲朝が謫居を訪ふと島をらこゝろあるに似たり加之彼金の牌の裏に。

眠鄉閑花逸二水亭一　仙禽再去還二東溟一
蓬レ春便覺孤霞迥　清影何時聚二我庭一

と詩句をさへ寫したり。ぬしを誰とにおらねども故ありぬべく思ふ隨に牌に水拔沃だかけて文字をに袖へうつーとりこれも又禿筆を染てその牌に件の和歌を書つきーに。鶴に再び空中に翔のがり雲を疾ぎて飛去りぬ今に至て廿餘年疑ひたえて解ざりしに。

210061

はからず舅に逢が華の跡を見るこそ奇特おれ。是故思ひあはせるに鶴はその比よりお
の島に往来したる歟鶴の異名を仙客と唱へ又仙人の驥ありといへば九皐に鳴き天外
に逍遥し。かゝる孤嶋にあらん事そのよしおしといふべからぞこは短冊も白やうにて。
さおがら鶴の君おらぞ羽に似たりかゝるべしとは思ひのけねど件の詩を印たる袖は。
燕袋は底に忍さめて出るにも入るにも腰にはおつとおかりしが數箇度の窮難に物
多く失ひつれと裏に讃岐院の山陵に通夜せしとき夢の中に感得おたる父が紀念の寶
剣と燕袋は今にありこれも亦奇といふべし。これ見ねへ。といひかけて腰に着たる燕袋
を掇撈り單は袖を出したまへば王女は袖に印たりける詩を見つ和歌を見つかくまて
奇しき物語の目前しる應報に久後たのもしきこゝちして。こなおれ曽祖義家期臣の
賜にて且こが丈夫の忠孝を天神地祇氏の神たち憐て後の榮をおらしぬふ例を思
ひゆづの海にとひし鳥の跡を今亦この島に鶴をる鳥ゑ靈あり君も信あり。かく灼然
なる奇瑞侍れば。とく姑巴島へ到らせぬへかし。とすゝめぬへば。これもさは思ふかし。詩
ぬへとて爲朝は先にたちて道をいそがし。やがて海邊に歸りぬふに林太夫は忙しく。船
をさしよして爲朝王女を扶乘し。まづ事のやうを問へば夫婦は滿顔に笑を含みて島山の

麓にて仙童にあひし事詩歌の事をべておちもなく聞えおらしぬひしかば林太夫は只
管に奇なるかおと唱歎し遂に纜を解捨て姑巴島を投て漕出さんとする程に。おほ愛た
きは枝に匂へる八の花凋し六ツは色香をそなへて更に新に咲るがごく。二ツの蕾は忽然
と開きて香氣はじめにいやましたり。おれも亦時にとりて吉祥に侍るおりと王女とと
もに林太夫が壽詞ざまうせば爲朝は船に乘おがら。桃の枝をその儘に浪打際へ楚と挿。
これもし曚雲にうち勝て中山南山南北の三省を掃除ことあらば。この桃永く榮ふべし。
と誓ひぬひけりさればにやおの所そのタより潮の退くと數十町大かたは磯となりて。
枝桃年々に花開枝葉をまし。その長丈餘に及べりと後にいひもて傳へたり。

第五十八回

飛鳥を射て神童兵を談ず

姑巴嶋に父子再會す

却說佳奇呂麻の島長林太夫は巴麻島の磯を漕出して只管船を走らせる水行の案内
はよくおりつ西へ〳〵とおる稍に蕾よりもはやく走り帆の南に見ゆる三の島あれや
何處と問ぬへば東馬齒山西馬齒山亦西南に見えたるは姑米山と答ふうしけりさて中
山を北に見て度那奇安根呪の島々を浪の隙にぞ瞻望やる小春の海は靜にて神の導く

快船ハ瞬うちニ數十里を半日が程ニ乘走らしーその日の未下刻姑巴島の磯へ着ヨけり。おゝも人おき島おれバ磯の衛の友呼ぶのみ岩うつ浪のおのづゝら事とふよしもあら磯に纜を投かけて爲朝王女を岸ヨのがしゃうやく船を繫ぎとめて林太夫も從ひ奉るヨ思ひの外おる小島おれど山ハ岩もて疊るどく造化の工致あやしまる目馴ぬ鳥の聲ヒけバ耳あらたまる松の琴ひく潮と亦うちよせる波の鼓もたかそがヨ勝を洗ふ佳境おりさきバ主從足引の山ヨ陟り溪に降ヨわけ入れバ桃の花あり四時おり〳〵ヨ開かとおぼしく花あり實あり蓉あり香氣殊さら鼻を穿て醉るがどく醒がとし羽客道士の葬やあると走ちかづきぬよ程ヨ忽地讀書の聲ーてけり。さればこそとて主從三人。点頭あふて樹の間よりつく〴〵と見入れぬへバ林の中ヨ人影ーて仙翁と仙童と只二人。花を袖に對て坐り翁ハ眉疑みお皓く形ハ瘦て枯松のどく骨逞しーて壯士に似たり。童子ハ髮をふり亂ーて年の齡ハ定かおらねど。その聲ハ十あまり二ッ三ッの上を過ず晴清く眉秀屆朱ホて玲瓏たる辯舌いとも爽なり。おの〳〵木の葉を綴りあねーて肩と腰とヨ纏着海松のどくヨかヒ垂れたる衣のはしその隙より見えたれど禮讓甚真實やかヨて童子ハ却て上座なる石ヨ尻をかけ翁ハ遥ヨ下ヨおり彼童子が物讀むを敬ひ冊ヒて耳を側おり〳〵難問そるとあり。爲朝ハおゐ木がくれて讀書の聲を熟聞て。ふかく怪みつゝ王女の袂を引搖ーて密やかヨ宣ふやういかヨ聞ぬふらん不老長生を根とーて真を修し丹を煉る道書おるべーと思ひはるヨ彼處に讀むハ兵書ハ往昔ヨが曾祖義家朝臣大江匡房卿より受傳ぬひーー訓閲虎之巻といふ兵學の秘書ありき源家ヒ嫡子相承ーて兄殺朝これを藏むホかるヨ平治の擾亂ヨ義朝おれを懷ヨーて東路ヨ赴き尾張おる野間の内海ヨて長田ヨ擊れぬひぬと灰ヨ聞くのみその後ハ彼書何人の手ヨありやホるよーおけれバおの年采いと〳〵をーく思ひたるヨこゝヨ童子が讀書をきけバ彼と是と相似たり。それかあらぬかとバかりヨ耳語たまふを ホらぞやありけん童子は一際膝をたかうー蓋武羅ハ漢の樊噲母の衣を得て草の上に佩忠孝の譽四海ヨ溢るといへり。されバ武羅ヨ和合緒あり忠祿の緒あり長短みお口傳もべて十二幅一尺上おる右の緒を帝釋と名ずく中を天上社緒と唱へ左の上の緒を頭神と名づく中央に日月の二天子を表ー增長廣目持國多門の四天を錄すもの〻と讀くだせバ翁傍よりこれを難ーて母衣ハ樊噲が母の衣を得たりしよりはじまるといふ說ハ絶て唐山の書ヨ見ねどもおまらハ字まつきて說を談たるおるべー或ハいふ衣母ハ毛衣ん鳥の

橘諸兄・弾正尹・雄略天皇

羽をもてこゝを織る今の羽織といふ名目は原毋衣より出たり。おれ矢を避んゝ爲ゝして。城攻のとき甲の上へ被ぐといへり。あの說いかゞはいはんと諾れば童子は莞爾と笑み。曰說かくの如しといへども樊噲が事は考る所あり。亦鳥の羽をもて織おをといふ說もこゝろ得がゝし。夫保侶といふくろの義。これを屐とき袋ゝ似たり。三代實錄卷の十七。清和天皇の貞觀十二年。三月十六日戊辰從五位下行對馬島守小野朝臣春風起請の二箇事を進るその一ゝ曰軍旅之儲當分貯ゝ在り薄と雖助て以保ん望請ふ調布保侶衣千領を縫造り。以不虞ゝ備んと見江ゝり。かゝれば保衣は毛衣ゝあらず且往昔より。みな假字にて書來れり毋衣と書武羅と書みなれ假字なり。保侶武羅五音相通ゝして。別ゝ故あるゝあらず此戎具唐山にはその名聞えず。あゝ大日本の古實なりと辨舌委みなく巻れば爲朝こゝを竊聞て只顧ゝ感嘆し後世定ゝおそるべし。かゝる小島に神童あゝて兵學既ゝ古今ゝ通ず奇なるかな妙なるかなと頻ゝ稱讃ゐなへば王女も舌狀捧つつ夫婦面をあはしぬゝ彼處ゝ翁は小膝をすゝめ君が發明その說を得たり。こゝらは偏ゝ穿鑿のみ敵を拉ぐの術ゝはあらず。もし水戰して水中ゝ交らばいかゝはせんげゝそのとは は屏の法亦龍王の奇法ありおゝらを豫て修そるときはみな水難を脫るべし。ゐか

孤雁出羽守等以下圖說兵錄ゝ見にあり

らば往時その名聞えし天智は御守ゝは藤の千方亦圓融院の御時ゝ丹波千丈嶽に蟄りし酒顛が類の魔緣のものを輙く擊とる術いかゝと問ば童子もうち點頭それらゝは亦方便あり。鑪をもつて太刀の目を搦通さしておれを佩戶羅密都婆阿路帝那永涉賀と神呪を唱左へ薙て砍ば右へ變化といふとも擊とるべし。ゐかりとはへども魔緣のもの。はやく隱るゝとあらば。打太刀も亦目標おけん。そのときにこそ眞言あれ。戶顯覽吠吽涉賀と五扁唱てゐづやのに手指左右ゝ相組て。その間よりこれを見れば妖精變化も隱れ得ず。敵もし大勢おほときは鶴翼雁行長蛇の陣時宜によつて布設一騎も漏さずこれを擊。勇將の下弱卒おゝ或は孤雁出群勢或は烏龍翻江勢提槍騎馬勢披身勢擊劍槍法勇を奮て堅を破り鋭を碎き立地ゝ擊靡け。敵は大將射て落を箭さきはかゝはゞとけん。といひつゝ聽て身を起し傍ゝ立たる弓ゝ箭夾てさり〳〵と彎固れば折しもあれ島烏の桃子を銜て空中高く翔揚るを。やり過して兵と射る矢壺たがはを諸羽を縫れて烏は撲地と落たりけり爲朝はこの形勢ゝ扇を開て膂高く射たり〳〵と譽ゐへば。童子も翁も樹の蔭ゝ人あるとをはゞめてゐれば。うち驚たつゝ佶と見て。あやしや船もかよはぬ荒磯ゝ物の聲をるはいと珍らし。何國の人いづくの浦より漂泊しぬゝかはゐらね

椿説弓張月後編卷之一

ども人なさかしく思ふから漢と晉との故事も聞まほしくいはれ。とくおあたへ。と呼びいるゝ主從三人忙しく桃林の中をもゝみ入り爲朝禮儀を正くして童子と翁とうち對ひ。おれは球琉山南省大里の按司夫婦のものゝ。近屬逆臣利勇を誅し亦妖賊曠雲を攻擊て勝に乘るといへども却て這奴が幻術にはかられ。士卒盡く討死し。其夫婦は辛じて。必死を脫れて佳奇呂麻ある由緣のものに誘引れ。松山の海邊より獨木舟にうち乘りて。はからずも巴麻島におもむき。神仙の教によつて更にこの處へ來れり。願くは二位の仙君神變不測の背扶かへし。吾儕を助て曠雲を擊亡さし。民の塗炭を救はしたまへ。先王尚寧才淺く應足らぬして。佞人を重用し。妖僧に蠱惑されて。終に國家を喪ひぬへり。されば天孫氏の正統斷絶するに似たれどもこれが妻は尚寧王の嫡女なり。彼といひ是といひ。義の仗ところ脫れがたく。波濤をおかして仙境に推參し。志願を告て。神助を祈る偏に海容まゐへと。叮寧に述ぬへ。童子は翁を見かへりて。この處は琉球國。三十六島の內おりと。汝がいひつれど。舟もかよはぬ浮世に遠き島守はさる事ありとも。あらざるべきと。いと外々しくものするに。翁はまゝ得も回答を爲朝をうちまもり。亦うち目鑒て赤やかなる眼底に涙を含み。別を奉りてより。僅七年に過ぎれども。主も家隸も潮風に吹くろまれて。汚れ垢づき。木の葉を衣とし。海帶を帶とし。山の獠にえいやまして。昔の姿もおくりぬれば。面忘れぬふあらん。いかに吾君御曹司八町礫。紀平次。ひものをと。名告えあへず。童子はもてる弓を捨さてはこの賓客は。父君にましませ。か。舜天丸にてはと。携りよりつゝいふ事も問へ。紀事も先だつは。涙の纖の洗ひ。松根はあらはまて。衰れおり。爲朝も又王女も。思ひかけねは喜さしの。あまる袂におく露の命あり。時ありて。ふたゝび相見るこが子の顏へ。ふりかゝる額髮を。搔あげては嘆息し。亦紀平次を見かへりつ。寒れも寒れし八町礫。おもふにまして。老にけり。おは舜天丸にあり。おるよ。叔も大きくおりぬるかな。これは夢にはあらざる歟。もし夢あらば覺ずもあれ。いふべき。更も夢あ。利問ふべ紀ことも夢あり。苦し紀も。は恩愛は迷ひにおそと弓とり。はやこゝをこゝろ引かえて。物のあはまをれば又哀歡氣色に。あらはれたり。これを見ては思ふにも王女は頭を撞得ず。長林太夫にとり著て。只よゝとのみ泣たまへば。林太夫は何の故とも。思ひかけねど。哀れさの。われにもかゝるむら時雨。おれば。傘借す心持せり。かゝりし程に紀平次は隨る涙をかき拂ひ。まづ何よりのまうそべき。今茲よりは七年むかし。安元二年仲秋十六日の風荒れて。雅君の御船碎け。高刑職萩等をはじめとして。從者は悉く波の底に入りにけ

れど紀平次は雅君を左手に高くさし揚て打かくる浪を物ともせず且く泅ぎいひしが。よるべき磯もあら潮に揺あげられ引おろされ力衰へ勢ひ竭て今はかうとたもふ折から大魚の背に助乗せられ其處ともあらずやうやくにおの島へ着てひひき。おきは高間磯萩が亡魂大魚に憑て雅君を救ひまゐらしたるなりと後に思ひあいぜー事あり。のく辛ドておの磯を流れ着しが雅君はいつ迄程にか絶きて呼びかへせどもそれかひなし。悲しくも又朽をーく慈に青海原を疲ぎてこゝに漂ひ着とえ紀平治ひとり存命て何かはせんと蹉跎ー泣より外にをべもなけれ腹ゐき死らんと思ふ折から。はからずも神仙の冥助によりて立地に雅君蘇生まーまーけり。加之件の真仙。この島を雅君にまゐらし剰源家相傳の秘書訓閲虎之巻を傳受ーこの書久ーく編蓬の中にありーを。これおの子の爲に纂めたり。これは爲朝に由縁あるものぞ汝紀平治勉て舜天丸を守り育武術文學を習はせよ亦箇様々々の物をもて弓を造り心放やかに時をまた後に用る所あらん。親子の再會疑ふべからず。これはけふより他ー島へ。うつるべーと仰もあへず空中によのぞりゐへり今さらおもへば彼真仙は巴麻島に迹をとゞめ亦大殿を導きて。おの島へ寄ゐにをり。おかるにその比この桃林の中において大きやかなる鶴の羽と金の牌を拾ひ得たり。おの牌は康平年間八幡太郎義家朝臣夢の鶴を放ゐひしとき島社足に著ゐへるものなるよーは彫おーたる文字にてはやあれ。やがて真仙の教ーまゝに鶴の羽毛もて征矢を刻鹿の角をもて鏃として第一の矢を伊勢皇太神宮と祝ひ祀る第二の矢を八幡太神宮とー第三の矢を門蘇社明神として主從祈念懈らず亦おの林おる東へ指たる桃の枝を折とりて弓とおし藤蔓を弦として或ときは野駒大鹿おんどに木の皮絢あはしたるを手綱にかけて雅君に騎射遠射を習ーまゐらせ亦あるときは砂に跡つけて手習らはー奉るに聰明厳智備おく未見の書籍をよく諳文武社兩道を極めゐへゐ紀平治おどが及ぶ所にあらず。その怜悧を見奉きゐ主從二人よるべおき島守とおる事は憂からで。いつの程にか大殿に雅君を遥與ーまゐらー。よくもそだちし養育し。と只一言の仰を知おは翌をもまたて立地に命をはるとも恨はあらじ。と思ひーはきのふけふおらず四時に花さき子を結ぶ桃にやうやく繁とむる老が玉社緒長かれと恵義の爲に惜む果敢なさ。元来賢き御こゝろにはは思ひあまりて足らぬ言葉を推も量らせゐふらんと一五一十を物がたる備罕おる忠臣のおゝにありともあり磯海の濱の真砂子はよ玉つくをとも竭ぬは寔に主從の奇縁へとて爲朝はおば〳〵おれを嘆賞ー巴麻島にて

獲たり者る短冊と彼詩を寫留たる衣の袖抜とり出して。その来歴を說まらし。今紀平治がいふ所よくこれと符合せり彼仙神ゐいかゐる故ゑてかく爲朝を憐ぬふや緣故ゐ曉がたけれどそのよしなくゐあるべからず。それのみまらで巴麻島にて仙童がとらしたる桃の小枝の八ツの花六ツゐ凋み。二ツゐ蕾みぬ。まかるゑその花見るうちゑ悉色香をましいづれも新ゑ開くがごときをこの島に来てはゆえて曉る一旦凋し六葉の花ゐ爲朝夫婦林太夫松壽鶴亀等がうへに象り。二ツの花ゐ舜天丸と紀平治に象れり只惜むべきものゐ高間太郎職荻のみかゝれば松壽鶴亀等ゑ再會せんも難ひまーとてそれらがうへきへ如此々々のものありけりと告ぬへば紀平治ゐ舜天丸と面とあゐーで掲焉き奇瑞を感佩まさりーが亦淫々とうちまをれ身方の徒を是彼と數へぬへど白縫とも吾妹子ともいひ出ぬゐ。おどて伴ひぬゐざると問ば亦舜天丸も母君何處に在を琉球王の長女をもて後妻ゑせーと宣へば。もー母君ゐ世を去りたまふか飽れて別るゝ契ゑあらゆ。まらーぬへとくりかへし問るゝ父の胸苦ーさゐ問ふ子よりなおゆやませば回答かねつゝやうやくゑうち點頭て嘆息ー往に肥の國を出ーまろ。われもその日の風難ゑ脱れがたく見江しかば白縫ゐ往古の弟橘姫ゑ身を比して涙を披きて水屑とまりぬ。まかれども風波おほ止まず船ゐ忽地反覆て從ふ壯士數十人。おの〳〵魚腹に葬らる。おゝに至て爲朝も死すべかりーをおほけおくも讃岐院の神靈の擁護ゑよつて琉球の屬島ある佳奇呂麻に漂泊して彼國の逆亂を聞くに忍びぎ小琉球の島北ゑて寧王女の必死を救ひ王子ゑ謁してはからずも大里の按司ゑ封ぜら是心の外ある婚緣も固辭ゑよーおく王女を娶り夥の年を經たれども人おそ住ねあはとところも琉球國の屬島あるゑこが子ゐこゝゑありけりと思ひかけねゐ訪ひもせず訪れもせねど時ーありて父子再會の情を述おゐみお源家を護たまふ神明佛陀の冥助ゐさらん又紀平治が忠義によるゆたくお數きぬひそと慰めぬへば舜天丸ゐつく〳〵とうち聞て泣ゆとをれば齒まむる。蔽衣玷袖のゆとくるーく別れ奉りしゐわが身まだ六ツか七ツの秋おれば。おん顔定かゑ覺ねど凡生とー活る物父あれゐかおらず母あり毎年ゑおの島山の松ゑ生育驚だゑも巢こもる程ゐ父母を慕ふて鳴くにいかでゑれ父をも認らず母をも認らぎゆふべは海の吹荒れてこゝらへかよふ職衙も友呼かゐー呼ぶものを親とも友とも家隷とも見るゐ八町礫のみ頼む所ゐ神仙の導きぬひて一トたびゐ父にも母にもあゐしぬゐめ。そゐいつ比と果ーおき渙を眺望て立あかも朝日の影もゑが國の天なつかーく伏拜む。

神も佛も親の爲命長かれ慈おく世より在せと祈りつる神の惠にありながら母まに絶てあふよしおくけふとにあらぬ歎びの。中に歎きを倍んとに。こゝろ筑紫に何處ぞや波間を披きて入りぬふとときけば今更朝夕に目訓れし海もおつかしとて樹の間遠く伸あがり伸あがれども潮けふり雲に挾霧に隔られ。とゞかぬおもひを啣たまへば爲朝もわが子のこゝろさこそあらめと推量りやよ舜天丸悲歎にいと理おれど母おーとて歎くべからず白縫元采烈女おれば夫の爲子の爲に嚮に王女の危窮を救ひて魂おれに憑うつり。みづから白縫王女と稱す。こゝに浮たる說にあらぎされば面影おそ些異なれ。物のいひざま勇敢智慮ゐ白縫に露こがふおとおーこれをおん身が母とも見よ王女ゐおどてものいひぬゐぬ日采雄々しきにさりげおく泣のみ母は情おらんやいひがひおーと激さま忍びかねつゝ轉輾び一膝高くよゝと泣あれや寶のわが母の臂かとさけば舜天丸ゐ王女に犇と携りつき尸ゐ浪に朽たまふとも魂魄この土にとゞまりて由緒ある人の體を借り父の後妻とおりぬへは。とてもかくても己が母おりおぞや只一言を惜こたまひて舜天丸ともに子とも召れひゐぬ。この島山ゐ數おらもおぼろ〳〵と晴に遠き海より深き産社恩まだ一日の孝をもつくさぎ大島に在すと知く兄君の事尾張おる姉君の事下野おる朝稚君ゐ。わが身まだ西も東もおらざりしと知仮初に面あゐーたれば見もおぼえず兄弟聚ありおがら形おき世のたゞをまひ。おらはおられぬ舜天丸がこゝろを哀れと嘶さば母御と名告ちーぬひね。と啣てば更に哽咽る袂をおば〳〵引搖そその手をやがて抱きよーおん身が恨ゐ理りおれども。もしおとめより母と名告らば面影認れる紀平治が實とせぎーて疑ひのはーともおらめとおもふおら只涙のみはふり落ていふべ知変もいゐざりける。そも寧王女ゐそのはじめ。おん身が父の密々へる鶴をもて玉に換たる由緣もあれば魂を憑とゐるや。おら縫がふたゝびこの土に顯れて良人に齊肩侍りーおり親子ゐ原是一世の契り人死して靈とおるば過去未来際をおるとゐいへど子ゆゑの闇ゐ生をゐえても迷ひてこゝにありとゐおらず良人に子ども影をゐせどこおほど〳〵によるべあり辛おゐ知うへに禍おきゐ大島にて自殺せーと後に聞つる太郎爲頼さてゐ又己が腹おりー舜天丸にとゞめたり。もし世にあらば年ゐ幾許かばかりの衣着もやそるとこが子に等し知年庚の童が腰の縫あげも心にかゝる綻びの長知別に短夜をねぶらでおかすおと多かりかくまてあくがれ物れもふ母が歎知ゐ人おらぬ荒磯にひとり守り冊く紀平治が千辛万苦におもひ比れば數おらず。その丹誠のかひ

ありてげに旃檀は二葉より芳しくあて衆木に勝れ鸞鳳は卵の中よりそ壮齊諸島に秀といへり人迹絶たる島に生育兵學弓馬は遠祖頼義朝臣義家朝臣に。おさ〳〵劣らぬおん身が本事おの父にしておの子あり曉雲を滅そものは舜天丸おらでそも誰そや武運は父にも母にも似おく久後おがく芭蕉布の糸の亂をうちおさめ鶴の羽衣清潔く浮世の民に捲ひつゝ亀の齡を十あまりあはして曽孫玄孫の後まで榮よと祝詞げどおねはき木の拭ひあへぬは涙おり舜天丸は今さらにいとゞ露けき言の葉に濡れたる袖をかきあはし。思へば高き母の恩ふたゝび物いひおらしたまふ歎びこれにまをことおし。涙をおさめねへかしと慰めねへば紀平治も小勝を拍て感嘆し。定に王女のおん言舌白縫姫に異おらぬ面影さへに似たまへり。おもへば七年前の秋一旦死たる親子主從ひとつに聚るこの島は冥土黄泉の街おらで長生不老の門おりと祝しまうせば林太夫も千秋萬歳と舞けり舜天丸はこれを見て。倶したまへるは誰やらんと問せねへば爲朝はうち点頭て島長をほとり近く招さよし。これは佳奇呂麻の島長に林太夫と呼るゝものおり。えゞめ爲朝秋島に漂泊して島人等に尊信せられその後王女も島長が家にかくれて曉雲が殘暴を避たるとあり秋曉雲といふものは如此々々の癖者おり亦大臣利勇が奸

惡松壽夫婦鶴亀親子が忠孝は殺やかに物かたるべし。去かるに爲朝が一昨の敗軍に相從ふ士卒もおく夫婦はづかに密あひて通賀道を走り身もいたう餓疲れて松山の磯に立在賊兵ふたゝび出来るを見かへれども禦ぐに術なく進退既に究たる折から讃岐院の神靈告させたまふことありとてこの嶋長が寮てより舟を件の磯によよりて。これを俟たまへ不思議にも窮難を脱るゝのをあらぬ父子面あはするとを得たり是併讃岐院の神助にして又島長が忠義へと稱たまへば舜天丸は紀平治もろとも感激して。神助と人の誠をしるかさね〳〵し福おりとて叮寧に歓び聞えねへば林太夫はおそる〳〵頭を擡てさていふやう爾そるどく小國の蔭を蒙る荒磯に人とおりてはへば生れしまゝにて物もおらねど按司王女のおん爲には命もをしからずとこそ思ひはおれ。さればおろかなるおのが心にだに誠はおのづから誠にて名將勇婦に値遇し奉りかゝる圓居に侍るとは身ひとつおらてわが島の光をますべくひとゝいと信だちて回答けり。さる程に紀平治は枝たはゝなる桃の子を。六ツ七ッうち落して爲朝王女にすゝめまゐらし林太夫にもこまをとらしつ。そのとき爲朝は石滴にて潔ざまづ彼桃をもて三社の神を祀り。あやし心中の所願祈念ドをはりて舜天丸に宣ふやう。桃は邪鬼を除くものゝ。

その事神代の巻ゝも見え亦風俗通ゝもありとかいへり。見つべしとが徒みお桃に由て福を得つる事。これ曚雲を滅その前衆あり且この島ゝ伊勢男山阿蘇の三社社神を祀り来りしと。究めてよし惜かおおん身いまだその舊をあらぢ夫烏ハ熊野權現の使者ゝ。されば神武天皇の官軍山路ゝ迷入りしとき天照皇太神八咫烏をもて官軍を導かしゝへるとありその太神を祀りおがらおぞや一隻の桃を惜みて烏を射て落したるいと不覺ゝと論しゝへば。舜夫丸謹でうおゝいり。仰寔ゝさる事おり桃をもて糧とすれば七年が間この島ゝて無益の殺生し侍ちぢみお父母のおん爲と。思ひ奉ゝ侍るなるされば烏を射たりといへども諸羽を縫ふて傷けぢ且くおれを懲すのみ今ハ放ちやるべしと回答つゝ落たる烏と引起し箭を拔ゝへば羽ばたきして阿と鳴おがらおのが捷む山路遥ゝ飛てゆく烏を衆皆目送りて。舌を巻き頭を傾け。百歩の外ゝ柳の葉を穿りといふ養由基も。これにいかでまさべ劣と稱賛をきば爲朝もいひつるとの鈍しく舜天丸微妙ゝかりゝけり弓箭ゝて國を治んものゝかくおそあれと只一言父の賞美ハ身ゝあまる。舜天丸よりおほ紀平治ハ身の幅廣おもふおるべし。かくて親子主從ハ花を席ゝ圓坐し て七年以来の艱難憂苦琉球亂離の一條をいとあめやかゝかたらひゝふに初冬おれば

夕ぐれて見しゝかハらぬ月影も燈燭をそゆるゝ似たり至誠ハ實ゝ神の如し一旦零落ひゝへども求めぢして洪福あり爲朝の子孫王とおり武將とおりしもうべおらずや。

東京神保町出版社

鎮西八郎爲朝外傳　椿說弓張月殘編卷之二

東都　曲亭主人編次

第五十九回

舟を造りて紀平治孤島を出
箭を負ふて舜天丸山北に赴

大里の按司八郎爲朝は。はからずも姑巴島にて舜天丸紀平治に環會互に別離の情を述て。只是黄泉の人の更に蘇生をつるがごとく王女も亦ゆく末来しかたの事を相語たまふ。物のいひざまは白縫姫に異ならぬ見えぬゝとて紀平治が殊さらに奇異のおもひをおを程に舜天丸もむとめて曉りて。或は歎び或は歎き慈母再誕のおゝちーつ親子主從島山に圓居をる夜は綾錦たゝまくをしう思ひなへり。そのとき爲朝は利勇曚雲等が事の顚末を舜天丸紀平治に說ちらし。又れ總角のむかしより戰場に臨どもたえて一トたびも不覺をとらず保元の敗軍は。頼長公遮てこが軍略を用ひなにざれば。ちかるに殺曚雲は舊虬山の古墳より出現ちさうとかいふ妖僧なれば幻術測がたしといへとも妖は德に勝ぢといふぞやは一戰に屈べき。と敵をおもひ侮りたるは生涯の悞ありき。加旃今茲は爲朝が機運あしかりけるを曉らずして軍を起したれば。おそも禍は敗

軍に及べるおもむかゝれば且くあの島に親子主従縣ひて時をまち来春俄頃に討て出あ
べ。曚雲が首を獲て軍門に梟んと掌を指どくおるべし。林太夫は翌つとめて。佳奇呂麻に
舩をかへし。来春三月の比及に。ふゝゝび一葉に棹きして。わが主従を迎ひへと宣へば。林
太夫うけたまはり。仰理おらむとはおもひはねど彼曚雲は幻術もて千里の外をも
あるといへば。こゝに在んはいと危し。賊軍一トたび出来らば外に援の兵おく脆れなは
んに舩もあらむ。万夫無當の勇をもて。おはしは禦ぎ戦ひなはめ。寡は固にもて衆に敵し
がたく人の膂力もかざりあり。かくて擒とおりなはや悔とも事及ぶべき愚おる身のか
くまうさば。嗚呼おりとおもすべけむど智者も一失あり愚者にも一得あり。遠況慮ある
ものは近き愚をあるおるべし。に。が佳奇呂麻人は按司王女の仁徳を慕ひ奉ること既に
久し。はやくこゝを去て。に。が島に赴況たまへ。年来剋勇曚雲に虐られたる島人等簞食壺
漿して迎奉らん事佳奇呂麻のみに限るべからむ。鬼界島奇奴由呂度姑島おんどいへば
さらおり。三十六の島人等聞傳るものあらば。招むして従ひ奉らん事更に疑ひおきもの
へ。といと信やかに勧めまうにに爲朝とにかく回答なはを王女紀平治もいづまをよし
と定めかねて。おべし氣色を伺ふほどに舜天丸莞尓とうち笑みて。今林太夫がいふとこ

ろ。みな是信より出て。吏便宜に似たれども安況に既かべ却危し。夫龍蛇は大海を深しと
せず。底を穿てこれに居ると況は人力の及ぶべきにあらず。おかれども餌をもてこれを
誘引は。竟に陸にも獣もべし。これ一旦の利に迷ふて。後にその身を忘るゝにはいとやか
くはに。が父佳奇呂麻に赴きなひ。彼此の島人等日おらず従ひ奉らば。曚雲暫おりといふ
ともはやくこまをあるおるべし。彼既に知るときは時日を廻らさずして攻撃おんそのの
とき。今茲はに。が父の機運よからずとて。戰はてやは止べき。かくてはふかく隱るゝにあ
らで。一旦の利に迷ひ。みづからおれを顯すなり。今父母の問せなゝを待ず舜天丸弱に
して議論せば。傍痛くれがさんが親の爲に思ふ程をなうすにてひと宣へば。爲朝小膝を
敲と撲おん身が議論わが意に稱へり。おらばこの島にあるべき敗吉凶いかに。と問た
まへば。舜天丸莞なよやう。愚意をもてこれを諫るに。に。が父母こゝに在ん程は曚雲千里
眼を睜るとも絶てあるよしなかるべし。故いかにとおれば舜天丸既に七年が間おの島
に漂泊おあるを彼妖僧はおらざるに。彼もしこれをあるよしあらば。そは身の仇とおる
をもあるべし。おらざれば。こそ舜天丸は悉おきとを得たれ。これ神仙の擁護によれば。わ
が父母こゝに在す事危況に似て却安し。加旃家君巴麻島に神仙の引接を得て更に

椿說弦張月殘編卷之二

この姑巴島に来ぬへり。巴麻ハ破魔にて惡魔を破る社義に稱ひ。姑巴ハ蠱破にて蠱妖破るゝの義に近し。ゐが大日本にて童子等が春のはゝめに弄ぶ崔小弓を破魔と名づく。舜天丸が弓箭を造りて神とし祀れるもおれに等しくみな是名詮自性といはん歟。かゝれゐが父破魔と姑破との二ッの島より再び起りて曝雲を討ぬハゞ再戰の勝利疑ひなし。只林太夫社こゝをかへりて今茲ハこゝに在せしと理状述て諫めぬへゞ爲朝をはゝめとして紀平治林太夫等にいたるまで聰明睿智に感服して志べ〳〵嘆賞をたりける。王女ハゐが子の怜悧さを見れバおもへバ娘しさのあまる袂に恥ひあへずげにや尺蠖の伸んとほるにあばしその身を屈すといへど力を養ひ時をまち先よくその身を屈して敵の不意に伸ぬハゞ軍威竹を裂が如けん。さハ待らぜゞと宣ふに。爲朝いよゝ疑ひを決して遂に謀を定め林太夫ハ潛やかに佳奇呂麻へかへるべしと仰をるにぞ林太夫ハ今さらに推辭奉るべうハあらぬ孫どもを志べしが程おりとも別れ奉らん事いと本意なしかゝるべしとハおもひかけねど粮米も夥敷し且按司王女に進らせんとて島織の衣おどもを持て来たり又舩を巖おどへ乘かけて破損せんときの爲に斧鋸釘さへ准備してひに見きべ志島にハ羅漢杉の大木多かり島の習俗おれば。

其も舩造る支ハおさ〳〵見おれてひに。こゝに留らば春まで輙く軍舩一艘を造り出しひべし。まげて留めぬひねといと叮寧に希へバ主從みなその志の淺からざるを稱賛をさて爲朝の宣ふやう島長をおゝに留めてハさとお妻子の心苦しく思ふべけれおてうその妻子を苦しめて志バしの列に思ひゐ江んや毎日に磯邊にさち出て長が歸るを待ひぶべきにとく佳奇呂麻へ立かへりて人社こゝろを安くせよこの島にハ仙桃あり。桃をもて粮とせバ米穀も欲しからずされど好意を他にせじと思へバ衣をバとゝめてこの冬の料に宛べきこと仰てさま〳〵に賺しこしらへぬへは紀平治も又いふぞう。其西國に人とおりてひへバよくこそあらね舩造る事社おれり既に斧あり鋸あらバ。島長が手伝僧るに及バゞ八町礫が老の手をさびに舩ハ輙く造るべし志からバよしや曝雲が賊軍こゝにより寄せ来るとも進退ほべて自在おり。ぬくてハ春の比及に林太夫れん迎に參らずとも往還こゝろまかせおるべしといふに爲朝ふかく歡びて紀平治が舩を造らバ。ゐれ又翼を得たるが如し林太夫ハもやく舊の島へかへりて春も三月のはゞめに至らバはゞめて緣由を告て島人等をかたらひ潛に兵粮を舩に積て泊の西濱に漕よし爲朝が宜野灣浦添を攻ると聞かバ速に来會せよと仰それバ林太夫ハやうやくに承

引て。とゝもかくゝも君のおん爲にいへゞと回若しつゝ次の日船底に貯もてる島衣斧鋸おんどを紀平治に遣與し。ひとり大洋に棹して佳哥呂麻へかへりけり。この下に話おし却說爲朝王女は姑巴島に留りて舜天丸紀平治とともに曙雲を擊破る計策を議しゐふ程に今茲も既に暮なんとせさても紀平治は齡かたぶきぬといへども仙境に年月を經たれゞにや氣力壯年のときよりも健よかりて日おらぬ一艘の獨木船を造り出したるが枯もむてゐ草葉の色の更に燃いづるを見て春の來つるをおぼえ爲朝夫婦この荒磯へ來ゐへるその日より僂れゞはや。百日に及べり今は時節到來しつゝ潛びて中山へ赴れて王子の所在を索ね奉り首里の形勢をもよく窺ひて時宜によらゞふたゝび宜野灣浦添の城を攻とるべし林太夫に謀を說示したれゞ兵粮は西濱にありおん爲朝ふたゝび旗を揚たりと聞かゞ松壽鶴亀等いへゞさらあり存命てだにあらん兵士は招ぜして馳參るべしとて主從四人既に軍議を決し。おの〳〵林太夫が進らしたる島衣を被て。琉黃商人に打扮又三社の神に齋ひ祀りし三條の征矢をゞ竹の節をぬきて。その内へ籠その餘舜天丸の神仙より獲ゐひたる源家相傳の兵書と金の短冊おんどは木の皮に經はし裹ゝて。こを船底に隱し入れ。思ひたつ日を吉日として主從伴の船に乘り遂に纜を解程に紀平治は楫を操り水行に熟て漕ぐ船の春は殊さら涙靜にて島山遠く見かへれゞ殘れる人のあらねども年來日來住みおれし名殘もさらに惜まるゝ浮世をあのぶ旅おれゞ那覇と泊の湊へよらゞ北へ〳〵と漕走らし。やがて愁眉を開くおる運天山を目的にて名護と羽地の間おる大藥河に乘入れけり凡この處までの海上百里にもあまるべれに。きのふの曉に姑巴島を出て。けふいとゞ日のうちに輙く着岸をつる車人力の及ぶ所にあらず加旃山を運天といひ河を大藥といふ。その名においていと愛たし。且南に名護嶽あり西北に今歸仁あり君子名立て民今歸仁是も亦己が君の武運をひらかるべき前祭おりとて紀平治が只願に祝し奉るも與あれゞ。みな笑壺にぞ入りたまふ。かくて船をゞ大藥河に乘捨て。各行李を脊負ひ行囊後項に掛け名護と佳楚との山間より恩納嶽のかたへ赴れたまふに主從四人おゝゝ道をもろともに走りおゞ人にあゞしめらるゝこともゞとて爲朝は舜天丸を將て二里あまり先にたち王女は紀平治を將て遙に後れてあゆみくふもし宿借らゞその暮に識を出しおくべしと遂て示しおゐねへどけふは山路のみを踏つゝ竟に人煙を見ざりしかゞ。おか〳〵に後ゞすぎこゝちして。その夜は恩納嶽のあとりに露宿しつ。明れゞ亦路をいそかしたまふあどに王女は

東京稗史出版社

愛にこの山まで。おぼし聽りて直國吉まで琛會又毛國鼎新垣等が忠魂まで偵せられ。おぼ〳〵危窮を脫れしも。今ハ八年の夢の跡。それのみ覺ずその人の面影ハ亦幻まも見るよし絶ておきを果敢なみ。これより路を東南まともて越來の間切まで入りぬふ。おゝハ彼真鶴か。擊まし跡と見かへれば名のみハ朽ぬ石橋まで涙や洟て苔の花散まーかたの戀おくて。路さりあへぞ立在ぬふを人こそおらめと紀平治まで扶掖れてやうやくまで中城の東なる。姑場の山里まで來ぬへば日ハ西山まで傾きけり。寔まこゝハ廉夫人のみづから刃に伏ぬふ。むかしなからの油樹も母の形見と身を絞る袖のみいとゞ露けくて。おゝ〳〵歎きのぬしや誰建てよりまだ遠からぬ寧都婆を見てもうらかなしく外の功徳を身まおめて。しばし念〳〵て伏拜み。去んとしていくそたび。亦たち戻る樹下蔭青葉の間と夕こえて孰うへぞ鳴く山鳥と共に塘をもとめたまひぬ

第六十回

燭を秉て山妻客を留む
劍を帶て樵夫婦を俟

さる程まで爲朝ハ舜天丸をいそがして山下ぬかくゞけ入ぬふにその日も既まで暮果て人影罕なる谷蔭まで。たゞ一軒〻日屋ありけり芭の葉蕭風戰ぐ燈より細き燈火の幽まもりて見えしかゞ片折戸まで立よりて。まづ密やかまで闚窺ぬへば年紀ハ三十あまりまして。山ふところまでいと似げなき顏色ハ九分の趣あれど天目一の命の炊妾まで偏目盲たる賤婦が芭蕉布織てゐたりけり。燈まで焚さりたるふし蔕の生樹の煙いぶせげまで霧の中なる花かとおぼしく昔をおのぶ面影ハ由緒あるもの〻零落て肇の宿まで世をぞ避けんかゞかりの處まで宿りを借とも身の仇とおる事ハあらじ物いひかけやと耳語ぬへば舜天丸もこれを闚窺昨夕一夜さ露宿して目瞬ともおくあかしたれば母君さそを疲勞たまいめ鄰家だまおき孤館ハおか〳〵まで憚るかたもひハを今宵ハおゝまで宿りぬへかし。と回答ぬふまさハとて半崩れかゝりし片折戸を推たハめて爲朝やがてもゝみ入りこれハ山路まで暮らしたる旅客おり。この夜をあかさしたびてんや。と親子もろともまで呼門ぬへば彼賤婦ハ見かへりたゝ忽地機の手をとゞめ。簷端まかよふ松の風芭根まで來鳴く鶯より外まハたゞて音づるゝ友どまあらぬ孤館まで緣しあればおそ路ゆく人の宿りをば乞おらめ。あるゞハ出て家にあらねど山下ならねば驛路まで遠し。見ぬふおとく兩ハさらおそ月さ漏まど透間の風を禦ぐべきよゞがも侍らぞ夜の衾ハ夫婦が外に彼げまおらする料ハなけれど。お主をも厭ひぬハせハ宿そぬひねと呼び入るゝ歎待ぶりまで親

東京稗史出版社

子は野路の驟雨に笠得たりける心持して。それ宣はするまでもあらぬ臥房ごゝ貸なゝ
べ頃日は暇さ余おどれ欲からぬ女子さへ伴ひたるが些し後たれど今はは追著らめ。
ゆるしぬへ。といひかけて爲朝は脱たる笠を片折戸ゝ赫びさげつゝ王女紀平治が目標
とし親子ひとしく竹簀子ゝ尻をかけて草鞋の紐を解ぬへべ賤婢は藤蔓の籠せし桶ゝ
水を汲入れて爲朝舜天丸ゝ足を濯がし掃べ稜のみ逆毛たつ破れ席をかさ拂ひつゝこ
おたへと誘引べやとうちあがる爲朝の後方ゝ跟て舜天丸も地爐のほとりゝ坐を占ぬ
へべ海螺ゝ竹を押曲て土瓶めきたるゝ湯もよきおどゝ沸かへるを木挽の碗ゝ汲みお
らべてさし出せべ受もちて親子左右を見ろへりたまふゝ壁おちて骨をあらはし柱は
朽て皮をとゞめず猪夫の家かとおもふゝ獸皮もおし。もし山賤の隱家ゝやとさすが
ゝ心放しがたくていふともおく坐をる賤婢はつくゞと見て客人たちは何國より
何處へとてか旅をべおぬふこゝらゝは耳おれぬ物のいひざまなりといふ爲朝はゝがが
うへを曉らるゝともやといと便おくはおもひおがら氣色ゝは見せぬはぞいはるゝご
とく吾們は於飛乃屬島おる硫黄商人おるが幸おれ事のみおほかるゝ都會の地は格別
ゝ生活のよをがもあるべく思ひて此度妻子さへ將ての花り來つるゝおゝらゝたりも。

又淡風靜おらぬ間切毎ゝ新関を居て。私ゝは往還を許されぬど聞えしかべ山南省お
る知己をおゝろざし徑せんとてかくのどく山路ゝ入りて迷つ來つ今宵の宿りは一刻
千金好意忘るべからぬ。さてもあるゞの生業は何事をかおたまふらんゆくべれうた
ゝおちぬて後は再び訪て些ばかりの報ひをぬべくおもふなり名告おらしぬへかし。と
宣へべ賤婢聞てうちほう笑み見らるゝごとく日光も疎き山中ゝ生涯をおくるから夫
は毎日ゝ薪を樵り。ゝらは芭蕉布を織り。これを里ゝもて出て露の命を繋ぐのみ名告
るべき名も侍らねべ後の報ひも願しからぬ現に定めおきは世のたゞぬまひなり天孫
氏の御裔亡びぬひ大里の按司爲朝ぬしは。よしおれ軍兵を起しぬひて島袋ゝて猛火ゝ
燒れ王女もその日擊れぬひぬと聞ゝしゝ灰の中ゝ骨を殘さゞるは爲朝夫婦虚死して。
脱ゝ去ゝるならんとて。曙雲法王御こゝろを安くおぬはぞ彼此に關を居旅客おどゝ宿
賃を事も許しぬはぞとおん亦被爲朝を捕捕とも擊とるとも去て首里へ參らべ按司ゝ
おしぬふべし。もし官職願しからずどまうぞものゝは生涯坐つゝ食ふとも餘ある金
錢をぬはるべしとて殘る隅もおく聞え去らしぬへり浮世ゝ遠き山ゝ住めば。おの概文
ゝこれたゝど夫はをり〳〵里へ出てをさ〳〵都の風膚も聞侍るゝ後の崇おを怕るべ

東京博文館藏版

けれ後の善報を受んとて客人たちを留むべきとかい都人い慈多く情薄しと聞侍れど。形こそかく鄙びたれ。ヨが良人い侠氣ありて。物の情をえるおれば今にもあれ歸り来るとも腹充たおくい追ひも出さず心安く休ひなへと信やかにいひ慰まべ爲朝い舜天丸とめをあいしもしヨがうへをおりてかと心ヨかゝれど外々しくその好意を歎び聞え。只江湖上孤物がたりヨいひ紛らして坐ほれば賤婦い爲朝の腰刀に目をかけつゝ端ちかう出て月影をつく〳〵とうち瞻め常ヨいあらぬあるゞの遲さよ近属い盗賊處々ヨ。ひはきして都のかたすら靜おらぎと聞くものをあお心おの夫おりとひとりごちゆゝ見かへりて客人おべし留守してたべ槍阪まで一走り。いゆ充て見んといひかけて。熟ー山とて只ひとり月を燭に走去け半舜天丸い賤婦が背影を目送りて父君いかにおぼをやらん孤目婦が歎待態あまりヨ信やのおるもあゝろ得がたし被ヨがうへを猜ーたりけん。おん佩刀ヨめをかけて猛ヨ外面へ出去りしい夫ヨ綷の趣を告おらし擊もとらせん爲おるべし。顧ヨこゝい山賊の捜おらぎい曚雲が察事卒の網羅を張つゝ俟ヨやあらん荊路い走りがたく朽梁いヨたるべからぎを山中い世を潜ヨよーといふともこゝも又久戀の家ヨあらぎ這奴等がかへり来ぬ間ヨはやく立去ねへかしと戸密やかヨ宣へべ爲朝聞てうち点頭。ヨれも去かも思ふなり。されべとて王女紀平治等おほ途ヨあり。これらヨも告ぎして親子遽しく脱ぎ去るともあるゞ夫婦が害心あり支黨ありてヨれを追いやゆくさ充も又敵地なり慈ヨ耽り利ヨ聚ふ山賊ヨもあれ曚雲が察事卒ヨもあらべあれ怕るゝヨ似て怕るゝヨ疑らず只うち捨てお充ねへ。と驟ぐ氣色もなく回答ねふ折から忽地外面ヨ人音して。これあり〳〵といふ聲い正ヨ紀平治おるべーとて舜天丸い耳聰く衝と出て片折戸をこおたより開充ねへ王女い笠を脱去て。纏てすゝみ入りねふ程ヨ紀平治い王女の笠ヨ。ヨが笠をうちかさね亦爲朝の目識ヨとて出ーねへる笠を取て是彼をひとつヨし朽たる庇うち見あげて。竹實子ヨ尻かけねふ主の草鞋をとりまあらすれべ舜天丸い最君の長途の疲勞を勦りて筧の水を汲かけて足の泥を濯しまねらーー小筵かき排ひて誘引ねへべ紀平治も引折たる裳をおろーて團坐ーつ主從四人。けふの慈なきを祝ー祝されて。さて王女の宣ふやう日い向暮とをるヨ心のみいそーくて。おん跡を慕ひまゐらせしが。思ひの外ヨ障る事の侍りて。いたくおくれ侍り夕月の影のいと隈おきをら世を潜ぶヨい便おく思ふヨ賢くも識の笠を出しねへべ問ずーておん宿りをこゝへけりといはや猜し侍り。と宣ふヨ紀平治い人や聞くとて佶と與を見入れ

つゝ勝をもゝめて爲朝にはうすやう目今こゝへ来たる途ゴて山賊かとおぼしき大男五七人樹立の蔭ゴついゐて。うち相語ふを外おがら聞てひしが首尾ハ定かおらねど。半ハ爲朝を生捕て。彩の賞錢を賜らんといふゴ半ハおきゴ從ハも衆議一決せざるが如し。この事を聞しより大殿雅君の方へ心もとおく王女ゴ注目して。足はやく走り過其處より路を横ゴとりて。樵夫だもゝよハゝと思ふ篤の細道を。五七町来る程ゴ偏目宵たる賤婦ゴあひぬ件の賤婦わが主從を見かへりて旅客ハ侶ゴ後れぬよゴあらもや。今宵わが宿ゴ二人の硫黄商旅を留たるが。一人が年の齡ハ四十あまりゴして。身の長高く又二人ハ少年ゴ侍り。もし心あてあらむ。こゝより南へ四五町はかり大ゑやかおる槐樹の下ゴちひさき家の侍るが。そらハが宿處おり。とをしえて行過るに忽地懐より片木一枚を落しつ呼留んとて拾ひて見るゴ。一人田土夫婦と記せり王女も是を御覧ゴて。熟文字のこゝろを按ずるゴ一人を合それハ大ゑ田土をあわすれハ里なり。大里の夫婦とハ八郎按司とゴが事おるべし。さてハ彼はやくも猜して今宵擊もとらん爲ゴそ此支黨ゴ鋼おらを。割符ゴやとおぼし。去からば嚮ゴ樹下ゴて。うち相語へる癖者等も是彼おおゴ夥計ゴてありけるかおと宣ふゴおもひあハするとのみおれハ彼賊婦を追ひとらへて後社患を除んとて。見かへるゴはや往方をおらせんと深念して。主從只管走りつゝやうやくおん宿りにたづねあてゝ。といひかけて。件ゴ概をとり出す齊もらさゞと密語のはゞめをハりを聞果て。舜天丸頻ゴ嘆息し父君聞し召れしか今紀平治が告るとこ爲いよゝ疑ひおきものゝまげてこの處を走り出遠奴等が罠を脱れぬへいと危し。と諫ぬへど爲朝ハ只點頭ぬふのみ。あるゞの婦がいひつる吏亦その夫の歸るを見んとて。嚮に外面へ出たる事を王女紀平治ゴ說おらし。舜天丸おむ〳〵言語を盡して。おゝゴあらんハ危しといふ。その危きをべわれもおまり去かりといへども敵を見て一歩退けば敵又一歩進むものゝ進退彼と我ゴあるのみ勢ひ竟ゴ脱れかたし天運こゝゴ循環せば彼嚮雲を伐拂ひて天津日光を民に見せおんもしゴが武運こゝゴ竭おハ。野人山賊ゴも勝がたけん勇士ハ元を喪ふとを忘れぬ。われおのづから奮分あり王女舜天丸紀平治ハ。且く物の蔭ゴ躲れよ婦か夫を伴ひかへるをまつゴハしかゞと丈夫のおそれぬ日本魂ゴ諫めかねゝる主從三人さハとて些し與まりたる筵屏風を引繞らし。蜘蛛の網拂ひてのくろひぬへべ爲朝ハ只ひとり燈火吻と吹滅て閨紀中ゴぞ坐しぬふ。その夜も既に真夜中と。思へど鐘もおとつれぬ。隙洩る風と谷川

の音のみいたく驚きつかゝりし程に外面ゝ忽地人の足音して片折戸扨推開き。あるゞの聲とおぼしくて千歳々々と數回呼びなからやうやくゝ地炕のほとりゝ探り着さても吾妹子がいぎたなさよ埋火一ツおかぎして何所ゝか瞞輸たるまだ甲夜おはゝどひとりこちおゝゝやあるとあゞら家の陝苑を烏夜のとり得ゝて勝手おゞへし栅の閑譬のふしの蜑管おろしてやがてうちつゞて引よしおがら行燈へうつを火光に思ゝぞも。對ひ坐したる爲朝と面をあたしてうち驚き八郎按司ゝをゝさずやあるゞゝ松壽おりけるよこゝ〳〵いかゝとゞかりゝもてる發燧の燃さしを勝へおとして亦かゝ拂ふ裙のつゞれのほつれ糸あを慢おりとかしこゝつ松壽ゝ些し引さがりて破たる襟をかきあゝし。まづ何よりかまうをべき去年長川の敗軍ゝ大將の往方をあらぞ繹累てあのびあのびゝ索まゝらせしが既ゝ島袋にて猛火ゝ焼れ灰燼とおりゝひゝと人もいひゝ是もあか思へは遺憾ほと〳〵やるかたおけれど白骨おりとも拾をんどおもふゞかりゝ自殺も得せず是首敢首ゝ身を屈して一日二日とおくるほどに王女も亦大里山ゝて擊れゝひゝと聞ゝしかゞ望ゝおゝゝ絶ながら遊筭曙雲を一刀うらみて死なゞ死てん。女々し死ざまをべきゝあらずと志を激せども鶴亀等も擊れけん。いひがひおゝ雜兵等ハ。ゝ方四零八落ゝなりしがゞ孰ゝ相語んよすがもおし。愁ゝ敵ゝあられて生拘らるゝともあらば何の命をもて怨を雪ん潜ぶゝあかゞと思ひ定めて遂ゝ樹に緣草ゝ伏し越來の山ゝゝけ入てきのふと紫しけふとあかす日の光も謙さ谷蔭も春さち得てゝ霞ようおをほだしおる大將軍ゝ再會し來る歌びこれにますとおしと首尾を物がたりて。いと信やかゝ歎待ども爲朝さらにうち解ゝいず。いゝるゝ所さもありおん。おかゝあれど頼みがたゝ人の心おり。かくまて忠義をおもふとおらば。おぞや婦ゝ侶れ割符をもて支黨を呼び聚ゝし爲朝を擊んとゝせられし。こゝろ得がたし。と宣ゞ松壽一切思ひかけぞ其妻を娶りしゝ色ゝ迷ひて志を移ずゝあらぞ。譬をるごとく件の女子ゝ偏目こそ育れ亡妻真鶴が面影ゝ似たる所あるのみおらぞ心さまいと信やかおれゞ。おはし浮世伐おのゞん爲ゝ。これが家ゝ身をよしたり亦この山下おる猶夫等に志氣あるものをかたらひ。これ張良が才氣おく。彼又蒼海公が勇力おくとも曙雲が出るを張ひ車とゝもゝ擊殺さんと竊ゝ謀りし事ゝあれど君真物も照覽あれ義を忘れて忽地ゝ。威豪に著松壽ならず人をおらせゝぬ。ぬ歟。と氣色を變て怨ぎれゝ爲朝呵々と冷笑ひ彼世俗の常言ゝ論より證據といふとあり衆皆出よと呼びかけゝへゞ筵屏風を搔遣りつ

つ舜天丸紀平治もろともに王女に前み出て松壽に對ひ東風平按司の隱宅ともあらて宿りし親子主從慰めよとにはあらねども嚮にはは足下の支黨とれぞし紀夥の野伏等が樹の下に立集合八郎按司を擒捕んと密やかに商議をはからぞ途にて竊聞せり。かくいへべるが佛を尊ぶに似たれども八郎按司は自然天地神明の冥助をはせべ島袋にて猛火を脫れ夫婦ひとつに路を走りて佳奇呂麻人に鵜引れ船を姑巴島の荒磯によして生死存亡あるよしおかり。舜天丸紀平治等に琛會靜け紀春の日和をまち得て更に兵士を集んため亦彼此の八重山を越來にちかき谷川の水は元來清けれど濁りし足下の底意をある結目多かる網代戸の藤の索は解よしあるともあはいひとくによしおからん。といはまたなへべ紀平治は拾ひし楫をとり出して目ちかく松壽にさし著つゝ行燈の火口を推向はかにこの楫をあれりや日本琉球異あれども八郎爲朝の老黨に八町礫紀平治ありとは年來聞も及びつらん十年にちかき春秋を住む人もおき孤島におくりて。雅君を守育はのらぞも大殿に再會をおしまあらし今此國へ押渡るかひあれべこそ汝が妻の遺せし楫を拾ひ獲て野心あるを猜したれ一人田土夫婦とは大里夫婦の反徒謎今宵汝が家にとゞめしとのよしを密やかに支黨に觸あらする割符ゝとは樹の下にて。うち商議る惡棍等と汝が妻の舉動をおもひあはしてこれをあるかくてゝ詭りあらそふゝと眼を瞪らし罵れば舜天丸も扇とりおほし姑巴島にありしときより汝が事は父母の物がたりにてこれをあるべいと頼もしくおもふもあから。思ふには似ぞ狗黨に入る昨の身方けふは仇心がらとて身は賤しくはゝ山賊とおれべこそ既に汝が妻と呼ぶ千歳とゝやらんがはが父のおん佩刀に目をかゝれとく支黨を呼つどへよ敵手擇ぬ舜天丸が本事を見せんと扇投捨刀の鞘に手狀かけなゝべ八町礫も賽子社上に刀の瑞衝立て左右よりさし挾む勢ひ猛き主從をと見かう見ゝ陶松壽は腰に帶たる短刀を取て紀平治に投遣し項さし伸し身をよしても身の濡衣を乾あへぬ露の命は惜からで。おからん後の名を惜む。おもひあまりてやうやくに首を擡て嘆息し風の音にも心れかるゝ君が凋落にをはをれば疑ひなふは理おり。ひとつに住むも小半年婦がこゝろはよくもあらねど松壽において今さらに南の海は陸とおるとゝ濁〻世の寡豪とおりて舊主に寇せんや抑この山中に身を隱したるおろはおをともおく日を送り落葉の中に坐を占て來しかたの事を思ふにこの山下は廉夫人の自殺しなへる姑塲にも近く又亡妻真鶴が擊れし越來の石橋に程遠からねべせめてその。おき跡吊んと足引の。

斧もまらぬ山松を鋸もて削おしゃがて二本の窪都婆を造りて夜ゴ紛れて彼所ゴ赴き。これを建て立かへるゴ偏目盲たる婦女子ひとり黒木を賣て歸るにあひぬ假初おがら物いひかけられ。まづそのものゝうへを問ゴ彼ハ樵夫某甲が女兒おるゴ近屬父母うちつゝきて身まかりにき山ふとこゐゴひとり住ども憑むべき親族もあらずかくても命ハ惜きものゴて柴を伐り布を織り旦ゴハ星を戴きて里へ出夕ゴハ月を負て山に歸る。こゝろぼそさを推量あれとうち歎く物のいひさま面影さへによく故妻ゴ似たり不り。と思もおのが慈ひゴて共ゴ一樹の蔭ゴ宿るも他生の緣とて捨るゴ忍びず我身を隱もよすがゴとはじめハ謂りこしらへて彼が家ゴ身を倚つゝ只いつとおく妻と呼び良人と呼れて小半年山兒となりしかひゴハ婚をならぶる友もおく鄰まらずの孤館の籬芭ゴ生る單葉もまのぶ爲ゴと思ひの外原來ハ千歳ハ山賊の女兒ゴやあらんずらん。さらずハ又曙雲が察事卒ゴて松壽とまりつゝ身を打まかし八郎按司の往方をまるべき謀計にてあり不る歟。そもまか。あらぬかとばかりに。まべ一果れて手を叉き。とさまかうさまおもへども。思ひかねつゝ山鳥の尾上ゴ朕らを月おらて。胸社雲のみ齋やら祭べ亦彼殺をうちのへし〳〵見てふたゝび怪み。まの殺ハいぬるころ某薪を樵る奔に太山搦を伐とりて。九本ゴ經木を削作し按司王女ゴおん爲ゴ谷河に推おがをに。大里の二字をまかちて一人田土と寫せしハ人ゴまられどとの爲おり友を聚る割符にあらず。この事ハ千歳ゴまら。ふかく隱ーてひひーゴ彼ハかゴーてこの經木を懷ゴしたりけんとてもかくても慰ゴ生をもとめて生を得ぎ義をおもへども仇とおる賊婦と契を結びてハ。いひとくともそのかひなし國亂れんとそるはじめより毛國鼎の教ゴ隨ひ大臣利勇が電ゴ媚て識者の爲ゴ讖を厭ハぎ不忠と呼れ不義と呼れ汚れたる名も國の爲ゴ。思ひかえつゝ王女を救ひ八郎按司ゴ値遇ーてより計略やうやく成就して利勇を誅戮またれども天運いまざ循環せず亦曙雲が幻術ゴうち敗らまて只ひとり生がひもおゐ充深山樹も春とーおれバ日の光やぶーわかねバはからずも大將軍に再會すその歡びを述んとほれバ心ゴ羞る事多し。かゝるときゴや人ハ死ぬ已おん〳〵。といひもあへず左手右手を見かゑり閉ゝ柱の下ゴ倚かけたる碓の槌を引よーて。みづから頭を打碎んとーたりーかバ彼とゞめよと爲朝の。いとも遽しく命するゴ舜天丸紀平治左右より拳ゴ携り腕をひきとゞめて。やうやく槌を奪ひどるゴ松壽いいよゝ身を羞て更ゴ頭を得も擡ぎ當下爲朝ハ松壽を打見て頻ゴ嗟嘆ー東風平按司が年來の忠信ゴおもひくらぶれ

べ今いふ所謂りにあらず。倩ものを按ずるに。これも亦噱雲が幻術のおす所にして足下のこゝろを蕩して爲朝を擊せんため歟。しからば彼千歳とやらんも妖婦海棠が類おるべし。されべおそ件は婦嚮にあべ〳〵爲朝が腰は刀にめをかけたれ。ヨがこは刀は源家は重寶鬼切蒔鴉に異おらぬ爲朝いぬる嘉應二年の秋讃岐國へ赴きて新院の山陵に詣たりける夜君をもとめ奉り父おりける廷尉爲義兄なりける左衛門尉頼賢掃部分頼仲加茂六郎爲宗源七郎爲成弟源九郎爲仲等に至るまで。夢の中に姿を現じ世のおりゆくべき光景をうち相語ひぬふ程に。松ふく風に驚き覺れべ枕方に一口の寶劍あり。これは是保元に事あるべきはじめ。ヨが父召れて新院の御所へ參りたまひしかべ臨時の除目行まて上北面におされ。近江國伊庭の庄美濃國青柳の庄とともに賜りたるける。鵜の丸の御劍おり傳聞この劍は白河院神泉苑に御幸おりて御遊の序に鵜をつかはして御覽じけるべ殊に逸物と聞えし鵜が。二三尺べかりおるものを被ざあげつゝとりおとをを衆皆怪しと思ふ程に。四五度におよびて後衛てあがれるを見ゆに金獲輪の大刀おりけり。近臣みな奇異の事おりとまうをに上皇もいと不思議に思食かおらず靈劍おるべしとて。やがて鵜の丸と名つけて。御秘藏ありけり。かくて件の鵜の丸を鳥羽院に傳ゆふを亦新院へまゐらせたまひ新院竟にヨが父に。とらしたまひし恩賜の寶劍夢の中にも父爲義が白糸威の鎧の上に佩たりなりと見しは寶歟。嗚呼奇おるかな。と嘆賞して。扳べ王散る秋の霜消に。後も子をおもふ親の形見の有かゝさに人にも告ずこの年来腰に離をとなけるべ。往に風波の難に係りて。舷の反覆らんとせしと。はやく帆綱を切おがせしも又妖婦海棠を只一刀に砍たふせしも島嶽にて火を避たるもみおこの劍の威德とれもへべ。身にもかえがたき物にはあれど且く足下にこれを貸をべしよしや千歳は曚雲が幻術のおすとおろにして。禍歌海棠に等しくともこの靈劍を扳かざして。切らべおどか切ざらん。はやく千歳が首を刎て色に惑ぬ忠心を。ためらしておそと說諭し人をやぶらぬ良將の理非明斷に面をあはして王女舜天丸紀平治も只顧感嘆したり不りそが中に陶松壽は感涙坐に拭ひあへず罪の疑しきを誅せず。剩かゝる寶劍をしべしおりとも貸ぬ人恩恵は固に身にあまる恥を雪ぐも今宵にあり松壽が爲には惡魔降伏あお歡しと禮儀正し人受とる劍を左手にかいこみ。今にもあれ千歳が髻らべ。隅背さらひなく砍ふせてなほ君に寇をる奴原あらばあれ。あるべき限り擊とめて。ひとりも脫しはいと。義を見て勇を外面に物音するはそれにやあらん氣色にお曉られ

東京稚英出版社

を吾們おゝまあらゞ事を計るに便あかるべゝとくかくれよといへゞえゴいれ色ある山吹の門のやり水影もとゝめず爲朝はまづ舜天丸と王女紀平治を潛ーつ。その身えやがてーづやかに筵屏風を引よーて親子主從も爲ともゴ舊の處へ驟ひつ待とーおれゞ山ふかく離鹿の角の木の間を千代と千歳が歸り來るを今か〳〵とゞかりゴ閨窺ておを坐ーけれ。